大阪支部発　時代を彩る目玉実践

お祭りフットボール

～なぜフットボールを教えるのか～

菅　耕史（枚方市立牧野小学校）

1. 実践の背景

学校体育の中で、サッカーを教える意味や中身は何なのか。サッカーは、足でボールを扱うため、手を使える他の球技より、ボール操作が格段に難しい。ゲームになるとさらに相手がいる中で、状況判断も問われながら、味方と協力してゴールを目指さなければいけない。ゆえに、サッカー初心者のゲームは、パスが何度もつながる場面などほぼない。人とボールが､混沌の中で偶然パスになったり、ゴールが生まれたりする。

私は、かつて混沌や偶然に支配されたサッカーゲームでは子どもは楽しめないと思っていた。だから、誰もがゴールの感覚を味わえる「じゃまじゃまサッカー」(技術獲得を目的とした体育同志会実践）を通して、６年生の子どもたちにサッカーの魅力を伝えようと試みた。結果、今まで休み時間は、特定の子どもしかやっていなかったサッカーを多くの子が楽しむようになった。

しかし、休み時間のサッカーは「じゃまじゃまサッカー」と違い、１人に１球ボールはない。１つのボールに群がり、ボールの動いた後を集団が移動するいわゆる｢団子サッカー｣である。人数も１５対１５など、ほとんど密集で動けない状態であった。当然、一人がボールを持つ時間はごくごく短く、一回もボールに触れず、ただボールの後を追いかけ、走り回っているだけの子どももいる。ゴールもほとんど決まらず、技術も未熟なため、多くのプレーが偶然・偶発的に起きるプレーばかりであった｡｢こんなサッカーで本当にこの子ら楽しいんやろか？」と思うような状態だったが、驚くことに子どもたちは、すごく楽しそうに眼をキラキラさせながらプレーに夢中になっていた｡｢先生､おれ中学行ったらサッカー部に入る｡｣という子が何人も出てくるほどであった。それまでの私は、技術的にうまくなることで子どもたちは、サッカーを楽しめるようになるのだと信じていた。しかしながら、技術的にどんなに未熟でも、ゴールなどほぼできなくても、子どもは熱中・没頭できるのだと知った。この休み時間の子どもの姿にこそ、サッカー（フットボール）を教材として教える意味があるのではないかと感じたがその後、どのように教材化すればよいか思いつかず長い時間が経過した。

2013 年兵庫大会で制野先生(和光大学)の｢サッカーは何を教える教材か？　～フットボール系球技の総合学習案～｣という話を聞いた。そこで､｢フットボール分科会を立ち上げてはどうか？」と提起された。サッカーやラグビー、フラッグフットなど分けて考えるのではなく、フットボール文化として捉えなおそうと言われ、自分が今まで持っていたサッカー観を揺さぶられる思いがした。また、イギリスの田舎に現在も残る『モブフットボール』の映像も観せてもらった。その映像は、現在の最先端のプロたちが行うフットボールとは似ても似つかないゲーム様相であった。混沌と密集の中でボールがどこにあるのかも正直映像からは分からなくなるほどであった。しかし､確かにプレーしている人たちは真剣で、熱中している様子は伝わってきた。国も年齢

も、ましてやプレーしている場所も街中（モブフット）と校庭など違うところだらけのはずが、私には不思議と子どもたちが休み時間にしていたサッカーとイギリスのモブフットボールが重なって見えた。
「モブフットボールを授業化したい」と思うようになり、２つのフットボール（モブフットボールと休み時間のサッカー）の共通点だと考えた祭事性を取り入れたサッカー「お祭りフットボール」を構想した。
授業時間ではなく、基本的に自由な休み時間にも、子どもたちが自発的にやりたくなるようなフットボールになれば、自分たちの生活にいろどりをもたらすものとしてフットボール文化を享受したといえるのではないかと考えた。
最先端のフットボールは VAR（ビデオアシスタントレフェリー)導入などさらに洗練され、プレーの判定に関しては議論の余地がますます少なくなってきている。フットボール文化の源流のような祭事的なフットボールには、混沌や混乱を起こす未整備で自由な部分が数多く残されている。必然的に仲間との議論やそれを経ての合意形成が求められる。それぞれの子どもたちが持つ、生活課題や生育環境がルールも未整備な「お祭りフットボール」では顕在化されやすい。必要とされる道具や用具がほぼないフットボール（ボールさえ代替できる）は、形にはまって生きることを求められる現代の子どもたちへの自由への渇望を喚起することになるのではないか。また、自由が故の不自由さ不具合をどうやって乗り越え、参加者全員が熱中できるフットボールを自分たちの手で生み出せるのか。その過程こそが「お祭りフットボール」を通して学ぶべき中身だと考えた。
さらに、今子どもたちは、放課後も自由な時間が奪われ、それぞれに孤立化しているように感じる。「帰ってから遊ぶ時間がないねん。」「遊べるの水曜だけ。」「習い事で疲れたー。」など、教室でつぶやく子どもたちの声。たとえ遊んだとしても、各々がゲーム機を持ってきて、沈黙の中でゲームをしあっている。そうした、子どもたちにとって、多くの仲間と１つのボールを巡り、攻防を繰り返し、一喜一憂するフットボールは、成長に欠かせないものになるのではないかと思う。
みんなで汗をかくほど走り回り、偶然が重なったような奇跡的なゴールに興奮する経験は、TV ゲームの世界にはない感動と、つながりを子どもたちの世界にもたらすのではないだろうか。
そして子どもにとって、スポーツも習い事、お稽古ごととして行われている。勝敗・技術の優劣などで競うことが、楽しみのすべてだと思い込まされている子どもたちに、自分たちが主体となりルールや楽しみ方まで考えて創っていく、「お祭りフットボール」は、スポーツ（遊び）本来の姿を子どもたちに問い直し、取り戻させるきっかけになるのではないかと思う。

２，実践の流れ　（別表参照）

実践した４年生のクラスの実態は、数名のサッカー好きの男子が毎日のように休み時間サッカーをしていたが、他の多くの男子や女子は、サッカーをほとんどやっていない状態であった。

【１時間目】
オリエンテーション後、クラスを適当二等分にしたチームで試しのゲーム（１４人対１４人）

最初にアンケートをとった。「ボール運動は、すき・ふつう・きらい」の選択肢の中から子どもたちに選ばせ、その理由も書かせた。予想通り、男子の多くは、「すき」を選び（ボール運動と聞いたのでドッジボールやバスケットボールも含まれる)、女子は「ふつう」や「き

らい」が多かった。「ふつう」の中にも、「サッカーのボールはこわい」などサッカーへの恐怖感を持つ子が多いことも分かった。また、足では難しいし怖いけど、手で扱うボールなら「すき」と答える子もいた。

すき　　男１２人　女２人
ふつう　男　１人　女６人
きらい　男　１人　女６人

オリエンテーションでは、サッカーとは言わず、「４年２組で『お祭りフットボール』をしよう。」と呼びかけた。そして、フットボールの歴史を簡単に説明した。

① フットボールとは、もともとイギリスの村々の間でお祭りとして、１つのボールを奪い合い、決められたゴールにボールを入れた方が勝利していたこと。
② 手も足も使っていたこと（のちにサッカーとラグビーに分かれていったこと）。

	ゲームの形態	教師の指示	㋜ーム様相と㋒どもの感想
1時間目	オリエンテーション　クラスを適当２等分 １４対１４	みんなが参加できて、楽しめるお祭りのようなフットボールにしよう	㋜ボールに群がる。団子。密集。 ㋒サッカーとラグビーが混ざったゲームは初めてだったので面白そうだなーと思ったら本当に面白かった。でも男子のボカ蹴りはやめてほしい。
2時間目	４年１組（学年２クラス）と合同でする １４対１４	微妙な判断でもめたときの解決方法は、「正直じゃんけん」	㋒人数を減らした方がいい。サッカーよりもフットボールの方が楽しかった。手でさわってもいいから面白かった。
3時間目	均等になるように話し合って４チームを作る　７対７、８対７など	チームに１冊のノートを渡す。作戦や感想などを書かせる。	㋒人数が減って、ける回数が増えて楽しかった。作戦通りにできたので良かった。誰もいないところにボカ蹴りする人がいる。
4時間目	リーグ戦　① 人数は７対７、８対７	ボカ蹴りは、「よいパス」か「悪いパス」か？	㋒男子がパスを回してくれない。パスが同じ人ばかり。チームのかけ声が多かったのですごく協力できて楽しかった。
5時間目	リーグ戦　②	攻める技術、守る技術、チームワークについて考えよう	㋜密集が縦に長くなってきた。縦にロングパスを狙う。 ㋒ボールを持っている人のそばにいるとパスが多く回ってきた。敵のそばにいないでバラバラに散らばってほしい。
6時間目	試合前にチーム練習を取り入れる リーグ戦　③	給食時間に前のゲームのビデオを見せる。毎回、あえて何も言わずに見せていた。	㋒今日攻める人と守る人に分かれてすると、バランスが良かったと思います。一人で走ってゴールを決める人より、パスしながらゴールした方がカッコイイと思う。
7時間目	チーム練習 リーグ戦　④	チーム練習はミニゲーム中心	㋜密集に加わらず横にいる子にパスしてから縦に運ぼうとするチームがでてくる。 ㋒ゴールへ先回りしてパスをもらってゴールへ入れたらいいと思った。（オフサイドにつなぐ？）サイドから攻めるといいと思う。
8時間目	チーム練習 リーグ戦　⑤	みんなが楽しむためには、フェアプレーの精神を持つことが大事と話し合う	㋒囲まれる前にパスする。強い人をマークする。相手の動きを予想しチームノートに書いて休み時間に練習したい。
9時間目	チーム練習 リーグ戦　⑥		㋒攻めるときは、ゴールの所に行って、守る時は、すぐに戻ることができてよかった。苦手な人が点を取ったり、最初より動いているので良かった。
10時間目	チーム練習 リーグ戦　⑦		㋒とてもおもしろかったし、楽しかったです。なぜかというと、声をかけ合ってパスしながらゴールするのがおもしろかったし、パスしてもらえた時、とっても嬉しかったです。

③ ゴールも今のような形ではなく、海に飛び込んだり、建物の壁にぶつけたりと多様であったこと。
④ ルールは、時代その他の条件などに合わせ、変わってきたこと。

次に、『お祭り』と聞いてどんなイメージを持っているかと子どもに尋ねた。「ウキウキ、ワクワクする。」「友だちと行けるから楽しい。」など、子どもたちは、お祭りに対して抱くイメージを答えていった。さらに、お祭りとは、外から見ているのと参加するのではどちらが楽しいのかを尋ねると、「友だちと参加した方が楽しい。」という答えが返ってきた。
それならば、「みんなが参加できて、楽しめるお祭りのような、フットボールを４年２組で創っていこう。」と言い、さっそくクラスを適当に２つに分け、グラウンドでフットボールをプレーした。子どもたちには、サッカーではなく、フットボールなので、手を使ってもいいことも納得させておいた。ルールは、危険なプレー禁止（子どもに何が危険なプレーかを確認しておく）以外は、なにもない。コートの枠線もなし。審判もいない。『お祭りフットボール』となるように、そのつど話し合って、決めていくことにしようとオリエンテーションでは話した。

子どもたちは、授業でフットボールをした後、その日のうちに学習感想を①ルールについて②技術やコツについて気づいたこと③自由感想にして、書かせそれをもとに話し合い、次回の授業に活かしていくようにした。1回目のクラスを半分に分けた１４対１４のフットボールでは、さっそく様々な問題が出てきた。それをもとにルールも決めた。

ⅰ）手でもたれたらとれない→手で持つ人は、タッチされたらボールをパスしないといけない。足でドリブルする人は、タッチされても関係なくプレーできる。
ⅱ）人数が多すぎる→クラスで４チームにして、リーグ戦にする。
ⅲ）うまい子が偏っている→勝ったり負けたりするから楽しい。チーム力が平等になるように子どもたちとチームを決めた。

【２時間目以降】
ルールに大きな変更はなかったが、試合をするたびに、様々なことでよく揉めた。
主な子どもたちの声は、
●タッチされたかされていないか・反則だったかどうかで揉めた。
●男子がパスしてくれない、女子が動かない。
●試合中や試合後に悪口を言われた。
●大げさに喜ばれて腹が立った。
●すねたり、自分勝手なプレーをする子がいたりして困る。
など、問題や苦情は絶えなかった。
私は、基本的にタイムキーパーをして、上からビデオを回していたので、審判はいない。ゲーム中に揉めて中断しても、時間は止まらない。自分たちのプレー時間が短くなるだけ。そのためなるべく、中断する時間を短くしようと、セルフジャッジ、フェアプレーの意識を高めていった。それでも、どうしても揉めたときなどは、子どもたちなりに、（正直ではないが）正直じゃんけんなどで決着していた。
悪口や相手への言葉での嫌がらせは、『お祭りフットボール』の精神に合うのかどうかを考えさせ、勝負は相手がいないと成立しないこと、勝ちたい気持ちに支配され、相手への敬意を欠くことがないように話し合った。すぐ怒ってすねたり、自己中心的にプレーする子は、まだ幼さが抜けきっていない特徴を持っていた。当然、自分のチーム・相手チームからたくさんの苦情の感想がよせられ、それらを冷静な時にその子たちに伝え、クラスの友だちが「全員で楽しく気持ちよくプレーしたい」と願っていることを伝えた。みんなには、その

ような子たちが、今までと違った様子があったら教えてほしいとも言っておいた。もちろん劇的に良くなったわけではないが、ある女の子の感想に

「今日、K君がボールを持っていてタッチされたときに、自分で『タッチされた。』と言っていたので、えらいなーと思いました。」とK君の変化を教えてくれた。

また、支援学級に在籍し、運動能力は高いがルール理解などに困難を抱える子へのチームメイトのイライラが募り言葉がきつくなっているのを他チームの子が指摘し、支援の子にもう一度チームとして、ていねいに説明する場面もあった。

３．実践を終えて

リーグ戦で、一度も勝利することができなかったチームの子どもたちの最後の感想から、フットボールの価値、可能性を考察したい。

☆最後もぼくのチームは、勝ったことがなかったけど、みんなと本気のバトルができてうれしかった。４年生の思い出になってよかった。

☆試合は、５対６で負けました。でも、すこしやりとげたような気分でした。楽しかったです。

☆４年のフットボールの試合は、思いっきり走って思いっきりパスして楽しかったです。

☆フットボールを初めてした時、とってもおもしろかったし、楽しかったです。なぜかというと、声をかけあってパスをしながら、ゴールするのがおもしろかったし、パスしてもらえた時、とってもうれしかったです。

☆私はまず参加することが大切だと思う。参加したらちょっとでもチームのために役に立ててうれしいから。

勝ち負けを競うフットボールで、最後まで一度も勝利できなかったのに、全力を出せたことに嬉しさや達成感を感じている子どもがいる。勝ち負けだけに一喜一憂することなく、みんなと心からお祭りを楽しんだことが心に残ったのであろう。近代スポーツがもつ勝利至上主義の考え方を乗り越えるポイントがあるのではないか。また、パスしてもらえた時、とっても嬉しかったという子どもは、パスが成功した時とは書いていない。たとえパスが成功していなくとも、密集の中で声をかけ合い自分という存在に気づき、友だちがパスを通そうとしてくれたことに喜んでいるのだろう。

フットボールの試合は、混沌や混乱、ボール操作が難しい中で１つのボールを巡って攻防を繰り返す。その中で、自分の存在価値やチームメイト、相手チームの友だちの存在の大切さを感じることができたのだろう。

「お祭りフットボール」は、一見するとただ多人数でボールを蹴り合っているにすぎないように見える。実際、「この技術がみんなうまくなった」と実感できることは少ない。球技のおもしろさの一つがゴールすることであり、シュート場面（ゴール前）の技術を媒介として教え合い、学び合うことは、教師にも子どもにも何を学ぶのかがはっきりしていて分かりやすい。

しかし、子どもたちが、フットボールに惹きつけられるのは、ゴールする技術だけではないように思う。もし、ゴールするために、コンビネーションを駆使し、作戦や戦術を立てることが、球技の特質であれば、フットボールほどそれらがうまく組み合わさって生まれるゴールが少ない球技はたちまちに魅力のないものになってしまうだろう。

では、なぜゴールが一番うまれにくい球技、フットボールが世界で一番人気のあるスポーツなのだろうか。

それは、ゴールまでの道のりが長く、その間にも攻守が入れ替わってしまう可能性が大きい中盤というものがあるからだと考える。

手でボールを扱う球技のほとんどは、ある程度の技術を身につけると、圧倒的に攻めが

有利でゴール前までほぼ確実にボールを進めることができる。

一方、フットボール（サッカー）は、足で扱う不確実さと、視野の低さからくる状況判断の難しさから、ゴール前にすら簡単にボールを運べない。ゴール前まで行こうと思えば、必然的にチームで連動して動かなければならず（コンビネーション）、パスやドリブルの技術、それらを上手に使いこなす状況判断も必要になる。たくさんの技術が一致して初めてゴールがうまれるので、喜びも大きなものになる。様々な技術が必要になるということは、子どもによって魅力に感じる技術も異なる。さらに習熟のレベルで、おもしろく感じる技術も変化していくという奥深さもある。

ゴールを奪う最善・最短の技術を合理的な方法で学ぶだけではなく、ゴールにたどり着くまでの過程（中盤）にも学ぶべき中身があり、そこがフットボールの特質にもつながっていると思う。

最初に「お祭りフットボール」では生活課題や生育環境が顕在化されやすいと書いた。まさに今回の実践でも子どもたちの様々な育ちや課題が表れた。ルールやプレーについて、議論する話題はたくさんあり、その中で自分たちはどんなフットボールがしたいのか、目指すのかをクラスで考えることができた。

時空間やボール操作、作戦作りなどが学べる「じゃまじゃまサッカー」は、初心者にも「分かって、できる」が保障しやすくすばらしい実践である。実際、私が最初に心を揺さぶられた休み時間にサッカーをしていた子どもたちは「じゃまじゃまサッカー」を通してサッカーにのめり込んでいった。また、「じゃまじゃまサッカー」はプロでも、似たものをトレーニングに取り入れている。いわば最先端のサッカーで１番重要視されるゴール前の攻防を切り取って分かりやすく教えることができる。

対して「お祭りフットボール」は、サッカーの最先端からではなく、未整備なフットボールの始りから遡ってまるごと与えようと思っている。そのフットボール文化をどのように咀嚼し味わうのかは、目の前の子どもたちしだいでもある。

子どもたちには、自身が抱える様々な課題や困難を、祭りという非日常や身体接触も激しいフットボールの中で表現させたいと思う。コートもない、審判もいない、混乱になりやすい状態の中、無心になれたり揉めたりをくりかえしながら仲間とともにどう生きていくかを問い直し続けさせられたらと思う。

４．今後の課題

感想を読むと多くの子は、フットボールを楽しんでいたと思う。しかし、ビデオで見ると、最後までボールをなかなかさわれない子もいた。そうした子の様子や意見に寄り添いながら、「本当にみんなが参加できて楽しむお祭りのようなフットボールになっているのか。」を子どもに考えさせたい。また、「お祭りフットボール」の中にも、技術や戦術は確かに存在する。それらを子どもがどのように探り深めていくのかを明らかにするのも大きな課題である。

５．「お祭りフットボール」実践への道のり ～球技プロジェクト・全国サッカー分科会の実践史概観～

菅さんには、球技プロジェクト研究最前線である「お祭りフットボール」実践をこの支部50周年記念研究誌に記していただいた。

ここまでの球技プロジェクトの活動は、舩冨さんも簡潔にまとめていただいている。

日名の方では、主な実践・実践者名をここに記す。そのことにより、この「お祭りフットボール」実践をより立体的に読者のみなさんには読み取っていただきたい。

【第１期】
（１）「闇に明かりサッカー実践　～サッカーは戦略･戦術だ！」（山本雅行、1992 年愛知大会提案集）
（２）「サッカーの教育課程づくり　低学年におけるサッカー教材の「優位性」」（舩冨公二、2001 年和歌山大会提案集）

【第２期】
（３）「2 年生のサッカーあそび　～まとあてサッカー～」（辻佳枝、1997 年愛知大会提案集）
（４）「じゃまじゃまサッカーパートⅡ（1 年生のサッカーあそび）」（2001 年和歌山大会提案集、山本雅行）
（５）「新任一年目のじゃまじゃまサッカー」（日名大悟、2007 年滋賀大会提案集）
※この間、文化学習・研究の成果と相まって【オフサイドルールがあるからこそのスルーパスが学習者の時空間認識を一層促し、サッカーらしさの一つである中盤学習への発展の契機となるのではないか】との仮説を立てるに至った。
（６）「子ども達がはまったじゃまじゃまサッカー」（東條憲二、2018 年滋賀大会提案集）※３：２ボール２球への画期的挑戦。

【第３期】
（７）「サッカーは何を教える教材か？　～フットボール系球技の総合学習案～」（制野俊弘、2013 年兵庫大会持ち込み提案）
（８）「お祭りフットボール　～なぜフットボールを教えるのか～」（菅耕史、2014 年宮城大会提案集）
※「なぜ、どうして、サッカー分科会での文化的論議が熱くなったのか？」（日名大悟、運動文化研究３５号）も参照されたい。